

“One health”を知ろう

後藤 一雄

帝京大学医療技術学部臨床検査学科

2004年に野生動物保護協会(WCS)が呼び掛けて、ロックフェラー大学が主催したシンポジウムで、エボラ出血熱、鳥インフルエンザなど21世紀の地球の生命体の健康に対する脅威と戦うために「世界は一つ、健康は一つ; One World, One Health」という「マンハッタン原則」が発表された。これは12のアクションプランから成り、「人間と家畜、野生動物の健康がリンクしていることの認識」、「土地と水の使用方法が健康維持に関与していることの認識」または「野生動物の健康科学は世界的な疾病予防に不可欠な要素であることの認識」などを社会に求めている。日本においてもこうした考え方を踏まえ、厚生労働省が薬剤耐性菌や人獣共通感染症に対する取り組みを始めている。ワンヘルスの考え方が野生動物や家畜を念頭に提唱されたことを考えると、すでに感染統御がなされ、飼育環境がコントロールされている実験動物に対するワンヘルスへの取り組みはこうした動物に対する取り組みと全く同じではない。たとえば薬剤耐性菌の出現については家畜動物では、エサに含まれる抗菌薬によって生じた薬剤耐性菌が食肉を通じて人に感染すること、薬剤耐性菌を含む動物の排泄物が環境を汚染することが論議されている。一方実験用マウスで報告されている薬剤耐性菌は、保菌者からマウスに感染し伝搬しているものと思われ、こうした伝搬の制御が論議されるべきである。また感染症に関しては野生動物やペットとの過剰な接触を避けるべきなどの論議がされているが、これも実験動物の感染症対策とは必ずしも一致しない。実験動物においてはハンタウイルス、皮膚糸状菌など従来から知られている人獣共通感染症は、野生動物や家畜のそれと比較するとほとんど統御されており、実験動物と人とが過剰に接触することもない。とくに実験動物で注意すべきは、このように従来から知られている感染症に加えて、新興感染症に対する備えが野生動物やペットで論じられている以上に必要なのではないかということである。最近の話題ではラットからE型肝炎ウイルスが検出され人への感染も報告されている。こうした病原体が頻繁に発生するわけではないが、現在の微生物モニタリング項目に含まれていない感染症出現の可能性は常に考慮しておく必要がある。実験動物と人とのワンヘルスを考えたとき、環境問題も重要なテーマである。実験動物と人との環境の場である動物施設において、マウスの住(飼育)環境は動物福祉の問題もあり適正なケージサイズ、室内の適正な温度・湿度維持、1ケージ内の動物数の管理または環境エンリッチメントプログラムの導入などさまざまな取り組みがなされている。一方で飼育担当者の労働環境についてはあまり論議がなされていない。「ワンヘルス」つまり動物と人との健康を考えるのであれば、動物施設での労働環境の改善も論議の俎上に載せる必要があるのではないか。本発表では野生動物や家畜、ペットで言われているワンヘルスと、実験動物で考慮すべきワンヘルスについての考え方を紹介しみなさんの論議を促したい。